

BOX 便り

“指示待ち人間” “自分優先” “打たれ弱い” 等々、世に言う「ゆとり世代」に貼られるレッテルである。現在 12～29 歳の年代が小学校で受けた国の教育方針によってそうなったとされ、社会の年長者からは何かと不評を買っている。在籍中の部員達もこの世代にあたる。

本当にそうなのか？それとも、社会のリーダー達の指導力不足が招いた結果ではないのか？そのあたりの実情と、部員達にもその傾向があるのかを少しでも知りたいと思い、入部動機、部活に対する意識、これからの目標や展望等を切口にして日頃の思いを文章にするよう OB 係を通して依頼したところ、連絡が取れない一名を除いた全員が応じてくれた。

現役部員達の熱き思いと本音である。

——編集長——

私達の“思い”

※（年次表記は昨年度のものである）

一年生 谷 壮大

2016 年春。同志社大学に入学するに当たって、興味がある部・サークルがあるか調べながら体育会・公認団体一覧に目を通していった。すると、「航空部」という見慣れない部が目に入る。それが「航空部」との最初の出会であった。

「航空」という文言から察するに飛行機関連の部であろう。物好きなやつもいたモノだ、と意識を他の部に移そうとすると自分にも「物好きな」友達がいたのを思い出した。そいつは飽きもせず航空機雑誌や空を眺めているようなやつで、小遣いすべてをその趣味に費やす姿を見ては呆れていたのを覚えている。その時、私は航空部に突然興味がわいてきた。彼は空の何に惚れていたのだろう。空には何があるのだろう。

そこからは早かった。体験搭乗を経て「飛ぶ」ことの楽しさを知った私はすぐに入部届を出した。入部してはや一年。まだ「答え」は見つかっていない。これからの 3 年でゆっくり見つけていこうと思う。以上が私が航空部に入った「きっかけ」である。

グライダー競技が他のスポーツと大きく異なっ

ている点はその「危険度」だと私は考える。もちろん今の制度、検査事項が不十分だとは考えていない。ただ「万が一」の場合はこの競技が危険度において他の競技と一線を画することは明らかである。

現在、我が部には安全のために多くの制度がある。その一つ一つに理由があり、おそらくそれ以前にはそのことをおろそかにしたために失敗した前例があるのだろう。そして、理由や前例を深く知ることによって「安全」な部活というモノは実現できるのではないだろうか。

来年度からは新入生が入り私も育成する立場となる。「安全」への意識を常に忘れずに、そして後輩に伝えていけるように活動していこうと思う。

航空部では他の体育会とは違いさまざまな「仕事」がある。合宿を例にとってもわかりやすい。多くの申請書や教官依頼、さらには食事の手配まで。それらの仕事を同時にかつ速やかにこなす必要がある。それは同時に今私に最も足りない能力の一つだ。グライダーに搭乗しているときもそうだが、「視野を常に大きくとる」ことが重要なのは万事に通じる。そして、「視野を常に大きくとる」ことは、前述した「安全管理」のための気付きへとつながる。

私は航空部にて目の前の問題を「視野を大きくとって」対処していこうと思う。

一年生 松本 大輝

航空部に入部したきっかけは、同じ学科にいる航空部員と知り合ったことです。元々、同じ学科に航空部員がいるらしい、ということは知っていましたが、ほとんど話したこともなく、接点は全くと言って良いほどありませんでした。

それが何の因果か、ある日その同じ学科の航空部員と話すことがあり、そこで初めて接点ができました。その時に航空部の活動の内容や様子、そして実際に空を飛ぶときの様子などを聞いて、改めて航空部への憧れを覚えました。その後、別の航空部員も紹介していただき、そこでもより具体的なお話を聞くことができ、一回生ではありませんでしたが思い切って航空部へ入部することとなりました。

ただ、それまで航空部の存在を全く知らなかったわけではありません。一回生の頃、入学式ですでに航空部のビラをもらっていました。元々空の世界への関心が強く、初めて航空部の存在を知ったときは非常に強く惹かれました。また、今出川校地での新入生向けの勧誘ブースでも説明を聞き、入部を希望していましたが、諸事情あり仕方なく断念しました。

そういったこともあり、再び航空部と接点ができたことは、遅ればせながらチャンスだと思ったのです。問題は色々とありましたが、このチャンスを逃すことはできませんでした。

自分が航空部に入部したのは、過去の航空部への思いと、同じ学科の航空部員と知り合ったことがきっかけです。また、その重要なきっかけをあたえてくれた航空部員には非常に感謝しています。

部活を行うに際し、日々の、小さな積み重ねが重要であると考えています。パイロットとして最も重要なことは、生きて帰還することであると思います。そこにはもちろんパイロットの技量は重要ではありますが、それだけでは成り立たないはずで、航空部は、グライダーという、航空機を運用します。ここでは、些細なミスや見落としが部員の生死に直接関わっています。それは、パイロットの操縦技術だけでなく、合宿中のランウェイにおける運用から、機体の組み方や整備、部員の知識や経験など、様々な要素によって決すると思います。

つまり大きさに言えば、部員一人ひとりがお互いの命綱を握っており、まさに一蓮托生なのです。そのような環境の中にあっては、部員の些細なミス、気の抜けが命取りとなります。操縦技量を磨き、大会などで結果を残すには、機体を万全の状態に保ち、安全に運用ができる環境やシステムが確保できていなければならないと思います。それらが成立するには、部員一人一人が知識や経験、あらゆるところに潜む危険を認識し、安全な運航に対する意識が不可欠です。そして、それを構成するのは、まさに日ごろからどれだけ努力や準備を積み重ねられるか、であると思います。特に、航空機の運用はしっかりとした経験やノウハウが必要で、その習得には時間がかかるにも拘わらず、部員はわずか数年で卒部してしまいます。だからこそ、日々積み重ねがどれだけしっかりと積めるかが重要であると思います。

自分が航空部での活動を通じて目標としていることは、常に冷静でいることと、何が必要か判断し、目標通り達成させることです。

飛行中、特に何かトラブルなどが発生した場合、少しの対応の遅れや不適切な対応が命取りとなります。そのような状況下では、素早く状況を把握し、正しい判断を下すにはまず自分が冷静である必要があります。そして、これは部内の活動に限ったことではありません。自分がこなすべき仕事有大量に舞い込んできたとき、パニックになって頭が回らなくなり、何も手を付けられないということは最悪のケースです。そうではなく、冷静に状況を見ることによって、まず何をしなければならないのか、解決策が見えてきます。

さらに、組織内ではなおさらですが、自分は何が求められているのか、また何をすべきなのかを理解すること、それに基づき目標を設定し、それを達成することです。合宿中や、それ以外であっても、各自何かしらすべきことがあると思います。それを、今自分は何ができて、何を求められているのか、組織内で何をすべきなのかを考えて動かなければなりません。そして、それがはっきりすると、自分の行動に関して目標が生まれ、何をどうすれば達成できるのかが見えてくると思います。当然、それは航空部以外においても同様です。何が自分に求められ、何をすることが必要なのか、そして設定した目標を達成できるかは、普段の学校生活においても、社会に出てからも必要なスキルの一つとなると思います。これらは一見当たり前のように思われますが、当たり前のことを当たり前になすことこそ、重要な基礎となると思います。

二年生 山口 七海

もともと飛行機や空港が好きだった。昔から旅好きの母に連れられて、よく飛行機に乗っており、特にワクワクと不安が入り混じる離陸の瞬間が大好きだった。次第に世界各地をつなげる空港の魅力にも惹かれていき、高校生の時に「将来は空港や飛行機に関係する場所で働きたい」と思った。同志社大学への入学が決まった時に、航空部の存在をインターネット上で見つけた。その当時は中学、高校で続けてきた陸上を大学でも続ける気持ちが強かったが、航空部も興味を持ち、一度見学に行ってみることにした。実際に新勅で格納庫に行くと、たくさんのグライダーが展示しており、心が躍った。先輩にも旅客機好きな人、戦闘機が好きな人、空が好きで航空部に入った人など、多種多様な人がいて話していても面白かったし、好奇心をくすぐられた。全くグライダーのことを知らなかったために参加してみた体験搭乗会で一度グライダーに乗って見たら、いつもは飛行機に乗らないとみられない景色が広がっていて、さらに自分で離陸から着陸までのすべての操縦が出来ると知り、一気に航空部の魅力にとりつかれた。航空部の雰囲気が入っていたのも相まってその日のうちに入部届を出し、晴れて航空部員となった。あの日味わった高揚感はいまだに忘れられない。

「航空部第一」で生活しているように感じる。もちろん学業も大事なので疎かにするわけにはいかないが、大学生活の今しか出来ないことである航空部の活動をできる限り優先する意識でいる。また、周りに負けたくないという気持ちを持ち、部

内、あるいは他大学の航空部員と切磋琢磨して自分の技術を磨いていきたいと考えている。一番大きな目標は、3回生の夏までにライセンスを取得し、3年、4年次と二年連続で全国大会に出場し入賞することである。今年の2月に初ソロに出た身でこの目標を達成するのは生半可な気持ちでは不可能であるため、人一倍努力し先ずはライセンスを取るところから着実に進めていきたい。また今年度は主将として活動することになる。「部員全員が活躍できる部活」を目標に、全員が達成感を得ることが出来、同じ目標に向かってそれぞれが努力し、活躍できる部活作りをしていきたい。航空部で機体に関する知識、操縦技術、主将として経験を身に付け、将来は航空関係の仕事につきたい。

二年生 森田 麻奈未

私は高校生の時に女性パイロットのドラマを見て、空の仕事に興味を持った。それ以来、空港に行って飛行機を見るのが大好きになり、将来、航空関係の仕事に就きたいと考えていた。同志社大学に入学することが決まって、どの部活に入ろうか悩んでいた時に「航空部」という部活を知った。将来の夢に一步でも近づける、また、大学生で空を飛べる、パイロットになれる部活は他にはないと思い、航空部に入部することを決めた。

学年が上がるにつれて、航空部に対する意識が変化した。一年生の時は、たくさん飛ぶこと、つまり自分のことだけしか考えていなかった。飛ぶことに関してもイメージフライトなど地上ででき

ることをあまりせず、ただ飛んでいたように思える。二年生になり、自分が責任者として動くことが多くなり、どうやったら相手にわかりやすく指示できるかを考えるようになった。また、自分が責任者として動くことで一年生の時には感じなかった、私は同志社大学体育会航空部に関わっているんだという喜びがあった。

飛ぶことに関しては、ただ飛ぶだけじゃ上達しない、私は人より努力しないといけないと思い、イメージフライトを繰り返した。次年度、三年生になるが、同期で助け合いながら航空部を支えていきたい。

現在の一番の目標は、まずはライセンスを取ることだ。三年生の夏までにライセンスを取り、JA06DWで二年連続全国大会に出場したい。そのために、ただ飛ぶだけではなく、飛ぶための知識、ソアリング技術、機体の特性などたくさんのことを勉強しなければならない。また、航空部に入部して、今まで興味がなかった整備士という職業に興味を持つようになった。一年生の時はどちらかと言うとあまり整備が好きではなかったが、耐空検査の係になり整備をしているうちに機体の整備をすることが大好きになり、もっといろいろな整備の知識を学びたいと思うようになった。

私の大学生活は航空部がほとんどを占めていると思う。航空部にいると、大変な仕事や嫌なことがあるかもしれないが、それ以上に航空部からたくさんのことを学んだ。航空部で学んだことは絶対に無駄にはならないと思う。これから大変でやめたいと思う時期が来るかもしれないが、今やっていることは無駄ではない、将来役に立つこと

なんだと自分に言い聞かせて頑張りたい。

二年生 西野 圭紀

私が航空部に入部したきっかけは、高校生の時、空に関する何かをしてみたいと思ったのが最初です。空に関する何かというのは曖昧な表現で分かりづらいかと思いますが、もう少し詳しく説明するとただ空を飛ばしたいということだけでなく、きれいな星を見るために遠出することなどあまり範囲を絞っていなかったということです。ですが高校在学中は時間や金銭的な面でそれをするのができませんでした。だから、高校を卒業した後、大学でその空に関する何かをしようと思いました。高校生の時、暇があれば自分が志望している大学のHPを調べて、その空に関する部活を探していたところ、航空部というものがあることに気付きました。それから航空部について調べるとグライダーという乗り物で空を飛んでいることや教官と呼ばれる国家資格を持った人達が飛び方を教えてくれること知り、なかなかおもしろそうがかつしっかりしてそうだなと思ったので大学に入る前からチェックしていました。同志社に入ってから航空部の他にチェックしていたパラグライダーサークルや天文サークルのどれにしようか迷っていたのですが一番しっかりしてそうな航空部に入ることに決めました。

私の部活に対する意識は学年を上がるにつれ徐々に変わっていきました。1年の時は、とりあえず空を飛ばのを楽しめたらいいなぐらいの気持ちで始めたのですが、1年の後半から副務になっ

て4月に新入生が入ってくるという時期が近付くにつれただ楽しんでいただけではだめだと思い始めました。今まであまり積極的ではなかった部活の学科の勉強をしっかりとしなければいけないとも思いました。そして今は空を飛ばすることを楽しむことを忘れず自分は上回生でしかも幹部なので今まで以上に気を引き締め上回生として恥じないような行動をとれるよう心掛けたいと思っています。

航空部の目標は全国大会優勝ですが私個人の航空部としての目標は単座機に乗りサーマルソアリングすることです。やはり上達すれば一人でも飛べるグライダースポーツを始めた以上単座機に乗りかつ長く遠くまで飛ぶことはある意味憧れでもあり目指すべきところだと私は思います。また、大学生活における大きな目標はまだきちんと定まってはいませんが、あえて書くとするならば将来において社会に出て役立つスキルを得ることだと私は思うのでそういう意味では航空部での上下関係でのきちんとした挨拶の仕方、合宿における集団生活、主務・副務の仕事における書類管理や会合準備、司会、後始末の仕方などを知ることは自分が将来社会に出るときに役立つものであると思います。

二年生 藤井 貴大

僕は元々なんらかの体育会の部活動に入りたいと思っていました。それは親の方針でもありますが、中学生の頃から運動部に入っていましたので、何か打ち込めるものを見つけるため体育会に入るのも悪くないと軽く考えておりました。そして入学

前に同志社大学のホームページを閲覧していたところ、「航空部」なる面白そうな部活を見つけました。父親がかつてハンググライダーをしていたことから空に対する興味はあり、3月頃には入部することを半分決めていました。

最後の決め手は体験搭乗でした。詳しくは覚えていませんが、木曾川滑空場でASK13に乗ったと記憶しています。上昇につい驚き声が出てしまい後席の教官に「大丈夫か?」と聞かれました。しかし、不思議と怖いという感覚はありませんでした。上空500mを飛ばす感覚が忘れられず入部届をすぐに書きました。親がスカイスポーツに対する理解もありましたので、費用面のことを相談するも快諾してもらい入部しました。

部活に対しては真面目に取り組むことを意識しています。昨年夏頃から急激に仕事が増え始めて今では複数の仕事を掛け持つことになりました。そのような状況で今では"責任"という意識を持って部活動をしています。

航空部の活動を通して、僕は社会に出てから必要な経験をしていきたいと思っています。自分の中で航空部は新たなスキルや今までにない経験を獲得する場であると思っています。部内会計の仕事自体は作業的なものになると思いますが、社会に出た時にいつかなるかもしれない"責任ある立場"の経験になると思います。また、ピストの仕事は合宿全体を把握し運営するものであり、連絡・相談や決断、臨機応変な対応など多くのことを学べる場だと思います。そこには苦勞もあると思いますが、それも経験と考えこれからも航空部の活動に励みたいと思っています。

三年生 佐藤 比奈子

思い返せば一回生の春に体験搭乗に行ったことが航空部に入る大きな決め手だった。百聞は一見に如かずとはまさにこのことである。行く前に先輩からグライダーに乗る素晴らしさを聞いてはいたものの、それとは比べものにならないほど上空400メートルの景色は爽快であった。自分だけの力で、この広い空を自由に飛べたならどんなに楽しいだろうかと思った。ここで4年間活動することはきっと私のためになるとまで感じていた。

しかし3年経った今、そんな思いはどこへいったのだろうか。今回原稿を書くにあたり「部活に対してどんな意識を持って活動しているか」と問われ、私は周りに顔向けできるような答えは浮かばなかった。けれども部の歴史に嘘を塗りたくると後々、後悔しそうだ。正直に書くしか道がない。

私は航空部に3年在籍し部内での様々な仕事を経験し、エネルギーを消耗してしまい、気力が失ってしまったというのが本当のことである。できることなら残りの一年、航空部ではひっそりと過ごしたいとさえ思っている。去年の事故や不祥事が原因なのか(これを読んでいる方がどこまで知っているのか知らないが)、日々の活動の積み重ねが原因なのか、今となってはもうわからない。原因らしきものはいくつも浮かぶけれど、これに関しては無理に一つに帰属させてしまう必要はないと思っている。原因を考えるのがしんどく、そのうえ何をしても改善策が見えてくるとは思えないからだ。このように、現在の私は非常に低い意識で活動していますと言わざるを得ない。

加えて目標を今回書かねばならないのだが、先に書いたように気力もないのに目標とは困ってしまう。しいて言えば大事な同期と後輩が、これ以上メンタルを擦り減らさないことを望んでいる。けれどそんな未来を実現するためには非常に険しい道のりであるとも確信している。なんというか、せめて航空部以外の活動に支障が出ない程度に元気でいてくれれば安心する。目標というより願望だが、同志社航空部のための学生ではなく、学生のための同志社航空部であってほしい。

原稿をきっかけに普段隠していたことを吐き出したわけで、そのうえ望まれないことを書いてしまったことが非常に恥ずかしい。私は正直に書いたものであり、この文章に多少なりとも罪悪感をもっていることを御理解いただければ幸いである。ここまで書いておいておかしなことに、私は弾圧されることを恐れている。もっと望むのであれば、これを読んだ教官方と OBOG 様の態度が少しでも現役に寄り添ってくれますように。

三年生 三木 嶺

航空部に入ったきっかけは、大学でしかできないスポーツをやってみようと考えたことです。「航空部」という部活動の存在は大学入学前から知っており、興味を持っていたこともあり、入部を決めるのにそう時間はかかりませんでした。

私が入部して以来も、グライダー界にはさまざまなことがありましたが、その中には悲痛な事故もありました。そうした状況のもとで、私が部活動にあたってとくに意識したことは何よりもまず

「安全」です。グライダーというスポーツはスポーツの中でも（他の競技にももちろんさまざまな危険がありますが）命にかかわるような事故につながる蓋然性が際立って大きいものであり、また残念なことながら実際に事故に遭われる方が出ること多いスポーツです。そうした危険性を内包した活動であるということを常に意識し、危険を避けるための努力を惜しまないことがこのスポーツを続けるうえでの最低条件であると思います。パイロットとしても、またグランドクルーとしても、ひとりひとりができることは数え切れないほどあります。そうしたもの全てについて可能なかぎり注意を払い実行するのが部員に課せられた責務であります。

しかし、人間には完璧はありません。どんなに注意していてもミスはあります。さらに夏の酷暑、冬の極寒、長期間の活動、人員の不足などといった（航空部としての活動につきまとう）要因がそうしたミスの誘発を招きます。こうしたことに対して、我々は単に「注意を徹底する」「（今までと同じ）教育を繰り返す」という解決策だけで対処できるのでしょうか。もちろん、注意力を向上させる余地はあるでしょう。教育時間をもう少し長くとることもできるかもしれません。しかし、さきに述べましたとおり人間には限界があり、また時間には限りがあります。4年間（あるいは6年間）という短い期間であればなおさらです。

こうした限界をみとめ、一段うえから現状を見つめ直すことが、私に必要なことだと思っております。そのような視座に立つことで、はじめてミスの「撲滅」までも視界に入れたプラン、たとえばマニュアル化の推進であったり、活動時間の根本的な見直しであったり、またあるいは自由に

物を言えるような闊達な風土の醸成であったりといったもの、について考えることができるのではないかと感じるためです。いま申し述べたような稚拙な思いつきなど、これをお読みの皆さまがたは当然すでにお考えであったことと思いますが、改めてこうした改革のためのプランについて議論を進めていくことがいま求められていると考えます。またそれは教官の方々、そしてOBの方々のご援助ご指導のもと、部員自身が主体的に考え実行していくべきものです。

そうした点をおろそかにしたまま前動を続行し、徒に競技の結果だけを追い求めて「勝つ」「勝つ」と呼号しても、基礎がぐらついたままでは勝てるものも勝てません。勝利を思う気持ちを固く保ち続けながらも、決して焦らずその道程を一步一步踏みしめてゆく、こうした姿勢が必要とされています。

生意気なことをさんざん申し上げましたが、こうして部活動を続け、真剣に取り組めるのもひとえに皆さまのご指導あってのことです。最後になってしまいましたが、改めてそのことに感謝の言葉を申し上げ、筆を置かせていただきます。ありがとうございます。

三年生 松崎 里佳

私は、大学では、周囲の人たちがほとんど経験したことのないことをしたいと思っていた。大学の入学式の日、様々なサークルや部活のチラシをもらった。その中に航空部のチラシもあった。数あるチラシの中でも「空を飛ぶ部活」という言葉に興味をもった。空を飛ぶということは、パイロ

ットなどの限られた人達しかできないことだと思っていたからだ。だから、大学生で空を飛べるチャンスがあるなら飛んでみたいと思った。そして、体験搭乗に行ってみることにした。初めてグライダーに乗ったとき、先輩方から聞いてはいたが、本当に空を飛んでいることには驚いた。そして、空の上では今まで見たことがない世界が広がっていた。目の前に広がる一面の空がとてもきれいだった。そして、大学ではこの部活に入ることに決めた。

一年生の冬、機材養成に入っていた私は先輩に呼ばれた。「機材養成に入っている3人の中から部内会計を選んでほしい」そう言われた。部内会計の仕事は大変だと噂で聞いていたので、話を聞いた当初は全くやる気がなかった。しかし、今までや将来のことを考えてみると、私が部員としてたくさん飛ばせてもらっているにも関わらず、航空部員として全く役に立っていないことに気付いた。そして、部員として何か部活に貢献したいという意識が芽生えはじめた。部内会計になることはその一歩なのではないか、そう考えた私はその役職に就くことにした。部内会計を担当することになり、私は1つの目標を掲げた。「絶対にやり遂げる」ということだ。自分から部内会計になると言っておいて、自分から逃げることだけはしたくなかった。

ところが、二年生の冬には沢山の困難があった。そのため、「絶対にやり遂げる」という目標を掲げたのにも関わらず、部内会計の仕事を放棄しようとしたこともあった。そんな時、先輩や同期達はミーティング終わりに何度も私のことを励まして、支えてくれた。そのおかげで、私は目標を達

成することができた。

部内会計という役職についたとき、部内会計の仕事は1人でするものだと思っていた。だから、ほとんどの仕事は1人で行っていた。しかし、二年間の部内会計の仕事を通して、部活の仕事は1人であるように見えても、実際は部員達に支えてもらってこそ、上手く成り立つものだと実感した。

部内会計を担当して学んだことは数え切れない。中でも、「どんな仕事でもチームで支え合うと上手くいく」ということを学べたことは、私の人生において大きな財産になった。

三年生 前田 一貫

私は、大学に入る際、何か本気で熱中できるものを見つけ、それに4年間全力で取り組みたいと考えていました。そのような中、1回生の時にどのような部活動があるか探していたところ、元々乗り物が好きだったこともあり、また水泳を嗜んでいたこともあり、航空部・水泳部・ヨット部を見つけ、それら3部に的を絞り各部の新勧活動に参加しました。その結果、雰囲気が馴染みやすく、私自身が最も輝けるだろうと思えた航空部に入部することを決意しました。

その後、1回生の秋頃に副将になることが決まり、さらにその翌年度主将になることが決まりました。副将になった時、他の部員からの信頼を得られるように、また部全体を良い方向へ導けるようにと、人一倍努力していこうと思いました。今現在も、合宿の際は誰よりも早く起き誰よりも早く準備する、普段の活動(ミーティングや整備等)

にも誰よりも積極的に参加するように常に心がけ、部の代表として恥ずかしくなく、他から認められる存在でいられるよう活動しています。部の運営に関して今年度も様々なことが起こりましたが、その都度私自身が、誰よりも努力できるようにとできる限り自分を甘やかさないよう意識していました。

その上で、まずは私が卒部するまでに同志社のみで合宿運営を行う、つまり合宿に必要な係を揃え、合宿を支えてくださる関係者に迷惑をかけることなく合宿を行うことを目的としています。そのためには第一にコミュニケーションを取ることが大切だと考えます。本年度のスローガンにもCFRP(communication for reconstructive process)を掲げましたが、まだ学連教官を始めとした関係者とのコミュニケーションが足りていません。

次に各部員が自分以外の部員を思いやることが大切だと考えます。各部員が自分自身の責務を果たすことはもちろんのこと、自分以外の部員がどれだけの仕事を抱え、どれだけの仕事を終えているのかを、先程述べたようコミュニケーションを確実に取ることによって把握する必要があるように思います。

以上に述べた2つの項目を完遂できれば、目標を達成することは容易だと思うので、是が非でも卒業までにこの目標を達成したいと思います。このようにある目標に向け部という大きな組織を運営できることは、大学生活の中で稀有な経験であり、その後の人生に対して非常に有意義な経験になると思うので、最後の1年間、悔いのないよう本気で取り組みやり遂げたい。

三年生 村上 大河

高校のときから漠然と空に興味を持っていたが、大学に入り航空部という存在を知り、どういものか興味をもち体験フライトに行った。たった短い時間だったがとても感動したことをおぼえている。このような世界があるんだなと感動しながらも大学の授業が忙しいという話もきいており、また体を動かしたいが座学ばかりして運動するような部活ではないのかと想い入部をしなかった。その後、大学で一年間工学系の勉強をしていくうちに自分がこれから何をしていきたいのかと考えることが多くなった。そのときいつも思い浮かぶのは航空部での体験フライトでのあの感動と爽快感だった。高校の時からずっと空に興味を抱いていたことから、職業も航空系に就きたいと考えており、空に関する知識も深めたいという思いが強くなっていったことから一年遅れてではあるが二回生から航空部に入ることを決意した。

部活は日頃のミーティングから合宿まで、行くたびに知らないことが増え勉強と復習の繰り返しだった。安全と効率は言うまでも無く大切であるが、特に私は自分の知識を人にちゃんと伝えることができるかという意識を常にもちながら活動した。上回生となり後輩に物事を教えていくことが多くなる中で自分自身がちゃんと理解していないことに気づかされるが多々あった。そこで改めて勉強することで新しく学んだこともあり自分の考えていることを相手に伝える難しさというのを身をもって感じた。この経験により航空部に関すること以外でも物事を人に伝えることができ

るか、深く考えるようになったと思う。

フライトではソロに出ることを目標としていたが、全体的な目標として航空に関してもっと学んでいき知識を深めていきたいとも思っていた。勉学を優先しソロフライトに出ることはできなかったため、知識のほうは深めていきたいと思ったのだ。そのため、私は次年度からは大学院に進学し流体について研究していく。流体について研究することで、空気の流れを、そして空を、広く発展させていきたいと思う。大学で一年勉強することで航空についての興味をもち、航空部で活動することでより深く知識を蓄えようと思っての道である。航空部の存在で、私の目標が明確になっただけでなくフライトという貴重な経験でさらにその先の夢というのも明確になったのだ。

これからも航空部での知識と経験を研究、またその先の職業にも発展できるよう頑張りたい。

三年生 中島 史陽

航空部に入部したきっかけは、他の部員のように航空機に対して専門的な知識をもっているわけでもなく、ただ大学でしか体験できないこと、航空機を操縦するという貴重な経験がしてみたかったという好奇心が強かっただけだったのだと思う。あとは他の団体を見学する中で航空部の居心地が一番良かっただけなのかもしれない。

あくまで持論だが、競技や技術向上を目的とした体育会の中で誰かに負けて”悔しい”という感情や、こうしたら次はうまくいくのではないかとい

う”探求心”が起きないのであれば、その競技を続ける意味はないと考えている。もちろん個人のモチベーションも大事だが、ただ”ああしろ、こうしろ”、”なんでこんな事をしたんだ”という風に力をもつ人間が、動く人間の気持ちを考えず、”伝統”や個人的な感情等により圧力をかけるような環境は、組織の成長や変革の妨げになり、個人のやる気の低下にしかならないと考えている。まもなく最上級生になる私は下級生を指導していく中で、下級生の行動の意図をしっかりと聞き、力で押さえつけるのではなく議論を行い、最上級生であっても後輩に指摘された部分はしっかりと非を認め、お互いに”探求”するという習慣を身につけるように活動している。

2017年2月現在において私個人の明確な目標はまずは就職と考えている。大学生活の中で航空部での活動は、精神面の強化になったと考えている。フライト一つとっても判断を誤れば事故につながり、イレギュラーの連続であっても冷静に対処し次の行動がすぐに考えられるようになったと思う。そういった面では普段の生活の中であっても役立っているのではないかと考えている。

最後に本年度は自家用試験の合格者や新機材車(日産エルグランド)の導入など様々な事がありました。今後とも当部の活動にご理解、ご支援いただきますようお願いいたします。

三年生 渡邊 治樹

私はもともと飛行機が好きで、幼い頃から将来は自衛隊のパイロットになりたいと考えていました。航空部を知ったきっかけは、防衛大学校にグライダー部がある事を学校説明会で知ったためです。高校卒業時の進路選択の際に、ご縁もあって同志社大学に進学する事になり、以前から気になっていた航空部の新勧ブースに真っ先に向かいました。そこで見たグライダーの写真や、京田辺の格納庫見学で見た実際のグライダー、さらに体験搭乗の際にグライダーに実際に乗った感動が忘れられず、航空部に入部を決めました。

入部後は、フライトはもちろん、フライト以外にも同期、先輩、後輩とのチームワークで合宿や部を運営して行く事に楽しみ、やりがいを感じつつ、あっという間に3年間が経過しました。

意識としては、3年生という立場から部を支え後輩を育てなくてはならないという意識を持って活動しておりました。具体的には合宿班長として合宿を行ったり、後輩のサポートなどをしていました。ただいま、執筆時は3年生の終わりにさしかかっておりますので、もうすぐ4年生になります。今後は、部の最高学年として気を引き締め、航空部生活に悔いがないようにしなくてはならないと考えておりますし、そういった意識で活動に臨む所存です。

目標といたしましては、まず、フライトと合宿係の目標として、第一にフライト技術を向上させ、できるだけ早くファーストソロに出なくてはなら

ないと思っております。その後は、ウインチオペレーターになるべく練習に励みたいと考えております。現役で全ての係を揃えるという部全体の目的を達成するべく、個人レベルでも目標を立て、全力で励みたいと考えております。また、全体的な次年度の目標としては、私が今までの部活においての活動で得た知識や経験を後輩に伝える一年にしたいと思っております。部活においての目標として以上のことをあげましたが、こういった目標を掲げ、努力することは、部活だけでなく大学生活においても人間力の向上に役立つ大きなチャンスだと考えております。残り少ない大学生活を悔いのないものにすべく、目標に向かって躍進して参ります。

また、私は2年生時に新人勧誘の係をしておりましたので、次年度の新人勧誘の際には、後輩をサポートし、10人、いや20人の新入部員を目標に新人勧誘に励みたいと考えております。本稿が出版され、皆様のお目に触れる頃には新人勧誘の結果が判明していると思っております。この翔友という伝統のある部誌にこのような目標を書いた以上、全力で目標に向かって努力したいと思っております。

3年生 藪 聡子

入学式当日、ビラが雨のように降ってくるビラシャワーの洗礼を受けました。家に持ち帰って、ビラの処分をしていた時に一枚だけ、雄大な空を映した目を惹くビラがありました。それが航空部を初めて知ったきっかけです。大学生になるとこ

んな世界を見ることが出来るんだ、と圧倒されたことを今でも覚えています。それから、航空部のブースに行きとても愉快で丁寧な説明を聞きました。その頃には入ろうと思っていたダンスサークルのことは頭の片隅に追いやられ、体験搭乗会に参加しました。上昇中、空に吸い込まれるような感覚が初めてで私も自分で操縦してみたいと思いました。それから現在に至ります。

航空部に対する意識は、当然のことながら、学年が上がる毎に変化しました。一年生の頃は、同期の人数も多く上級生のサポートのおかげで年間楽しく活動していました。自分のミスのおかげで先輩方が怒られることが心苦しく、やることをきちんとやらなければ周りに迷惑がかかるという意識ができました。

二年生になると後輩ができ教える立場になりました。ようやく慣れてきた頃に、人に教えるなんてことが出来るのかと戸惑った思い出があります。しかし、今まで教わった先輩方もそういう状況だったのではないかと考えると、自分もしっかりしなければいけないと身が引き締まりました。教えるのに集中する余り周りが見えなくなることが多々あり、後ろにも横にも目があればいいのに、と本気で思いました。

三年生になるとお世話になった先輩方がどんどん卒業されていき心細くなる反面、航空部にどのように貢献できるか試された一年でした。部内では役職を持っていなかったのが委員会の役員を務めることで、間接的ながら何か返せばいいなと考えていました。同志社大学航空部を背負いながらも俯瞰する立場から、当然だったことのありがたみや新たな気づきがありました。一方で、先輩

の姿を追いすぎていたことを反省しています。先輩は元より後輩にもっと、自分で意識していた以上に、気を配るべきでした。

グライダーを飛ばすという一つの目的のために、機体係やラジオ係などそれぞれ役割があり、また全てを統括するピストがいるといった組織運営が体に染み込まれるのは非常にいい経験です。これまでコミュニケーションや報連相の大切さは身に染みて感じましたがそれを差し置いて、私が一番実感したことは人がいること、仲間がいることの重要性です。どんなに高い目標があっても共に歩む人がいなければ、目標はおろか組織が成り立たなくなる可能性があります。同期がいること、先輩後輩がいることのありがたさを痛感したのは、皮肉にも人が少なくなってからでした。部員がいる、それだけで安心したり救われたりすることが多々あります。組織とはどうあるべきか、そう考えざるを得ない状況で得た自分なりの答えは、これから社会に出ていく上で一つの試金石として、自分自身の糧になると思います。3年間の航空部での自分の役割は、はっきり言ってしまえば周りに甘えていて、何をしたのかと問われると戸惑ってしまうほど情けないものです。そんな中でも、ご指導して下さる教官方、OB・OGの皆さま、面倒をみて下さる先輩方、慕ってくれる後輩たち、いるだけで安心する同期に感謝の気持ちでいっぱいです。航空部で体得した学びは予期しないタイミングで生かされるのだらうと今から楽しみにしています。

四年生 竹葉 智己

卒業を間近に控えてこのような文章を記すにあたり、折角記すからには後輩の皆さんに少しでも役立つようなものを記しておきたい。

私が航空部に入った理由は、まあ早い話が“操縦”に大きな魅力を感じたからである。ところで、航空部員の入部動機は、大別して以下の3つに分けられるのではないかと思う。一つ目は飛行機とかそういうメカものが好きで入ったという人。二つ目は空が好きという人。そして三つ目は変わったことがしたいという人。もちろん、この分類に入りきらない人もいるだろうし、1つだけでなく、2つ3つと複合的な動機で、めでたく入部した人もいるであろうが、大体こんなところだろうと思う。ちなみに私は、前述したように操縦に魅力を感じて入ったのでありおおまかには一つ目の分類に入ると思う。さらに、正直なことを言うと、空よりは海や山の方が好きであるし、何か変わったことがしたいというタチでもない。

部の運営においては往々にして、他の部員と意見が対立することがあるが、そんな対立や価値観の相違も、この入部動機と関係していたりもするのではないかと思う。もし、他の部員と意見や考えが対立した時、こういうことを考えると相手を理解するヒントに少しはなるかもしれない。

部活動で意識してきたことは色々あったと思うが、その中でも4年間特に意識してきたことで、ここで書いておいて有用そうな事と言えば、それは「いかに卒業まで平和に過ごすか」という私な

りの課題であったと思う。多くの先輩方と同じように、私もまた、入部からしばらく経つと、部の様々な面での厳しさを知るようになったが、その時以来意識してきたことが如何に平和的に過ごすかであった。荒んだ先輩の姿、怒る教官の姿を見て、どう思うか。反抗する、特に何も思わない、はたまた部を辞める等々、個人によってどういう行動をとるかは様々であろうが、少なくとも私は、角を立てずに進むという道を選んだ。まあしかし、部活動をしていれば、理不尽に怒られることや、腹立たしく思えて仕方がないこともまたあると思う。そういう時にどのように対処するかもまた重要な話であると思うのだが、私は、①適度にテキ

トーに聞き流す→②説教であれば本質的に何が言いたかったのか考えてみる→③誰かに話す、というようなサイクルをたどって対処していたように思う。①は理不尽に怒られることも残念ながらゼロではなく、全てを真に受けてはやってもらえないがための策である。②では、理不尽な説教にしても意見の合わない相手にしても、まあ一つや二つぐらいは参考になる点があるかもしれないので、とりあえず考えてみる。③で、最後に来れば少し面白くして誰かに話すのである。やはり、誰かに話してみることは重要であると思われ、自大でも他大でもこういうことを話せる相手がいると心強いものである。

編集長独白

各人の文面から懸命に部活と向き合っている姿が伝わってくる。一方、明るく伸び伸びとした部活ではない雰囲気も感じられるのは残念なことである。何かしらの「強制」や「圧力」で強いられてする部活はストレスになり、じめじめとした感情はモチベーションの低下に繋がる。決して良い結果は生まない。第一にそのように感じている当事者が最も不幸である。指導陣はそのような思いをする部員が出ないように留意しなければならない。また、本来の目的である「飛ぶ」ために費やされるべき時間と集中力を、そのための手段である地上での仕事や雑事に多くを割かれたり、合宿に要求される種々の「係」になるためや資格の認定を得ることに消耗しているようでは本末転倒である。「目的と手段」をよく考えて、効率化・合理化を常に忘れてはいけない。その為には、何事も自分達で考え、能動的に動くことが大切である。

生気に溢れ、全部員が同じ方向を向いて努力する中で、苦しみ、喜びを共有して支え合う仲間が居てこそ部活は有意義なものとなる。夢を語り、理想を追求するのが若者である。そしてそれを実現する場の一つが大学の課外活動としてスポーツをする部活動であろう。そうであるなら、目的を達成するためには自主的に動き、決して妥協したり、あきらめたりすることがあってはならない。

諸君は夢を語り、理想を追求していますか？